

大神島うがんじま

神野麻郎

男は棧橋に下り立ってから左右を眺め、まず左手の方へまわってみようかと思いついた。同船した人々は、ひとかたまりになつてもつれあうように右手へ、丘の中腹にある部落への登り口の方に歩いていく。若い男一人に中年女四人という妙な組み合わせのその一行は、島尻港から十数分の連絡船の中での話に、国政選挙の戸別訪問に行くというので、ほう、もうそんな時期なのか、戸数三十戸足らずの大神島うがんじまのような小島にもわざわざ出かけていくものか、と男には珍しかった。

島尻港で、白い船体の後部の小さな入口からどやどやと入ってきて椅子席の前後に座を占めた彼らは、はじめ互いに、陸から持ち越してきたものか、誰かの身内か近所かの、鬱にとりつかれてほとんど部屋に閉じこもりきりになつたという若い女のうわさをしていた。大学出て、学問もある人がねえ、と同情したそぶりを示し、でも信心すれば必ずよくなるさ、そうさそうさ、と話しあつていた。それから船が出港してサンゴ礁の間を神経質に徐行していくとき、女の一人が男に話しかけ、自分は以前癌を患い、どの病院にかかっても治らなかつた、治療のために頭髮もすっかりなくなしたくらいだ、でも四年前から始めた信心のおかげで、今はもう九十五パーセントまでは治つたと医者にいわれるまでになつた、とまっすぐ男の目をとらえていった。男と同じ四十前くらいの、髪のみさふさした血色のよい女だった。また女は、こちら宮古ではウタキとかいって昔からの信仰の場所がありますが、それにまつわるいろんな迷信があつて……といいだすと、その話題は仲間の間に引きとられて、そうそう、ウタキのそばの土地は安いよ、崇りがあるといつて……、ウタキの神に仕えるツカサとかサスとかいう神女がいますが、彼女たちの家は決まつて孫の代からよくないようだね、精神的におかしな人も出る、皆頭はいいですよ、でも三十か四十になつておかしくなる人がよくあるね……、そうさそうさ、神の靈力シヅがきついついていうさ、だから集会に来ても、身体が硬くなつて上人様に掌も合わせられないさ、こう、身体が震えてさ、逃げるように帰っていく人もいるさ……。先の女が、行く手の大神島も迷信の強い所なのです、宮古でもいちばん強い方かもしれない、私たちはそういう昔の迷信とも闘わなければならぬのです、と真顔で男にいった。船を下り際に男は、その女から、彼らの宗教団体の名誉会長の講演記録を抜粋した冊子と、連絡場所を刷りこんだ名刺を手渡された。

左手には粗末な網小屋が何棟か立ち並ぶだけの所在ない埋立地が広がり、その向こうに防波堤が延びている。後ろからめくりあげてくる強い風に、男は帽子を押さえながら防波堤の方へと歩き、上つてみると、西側の海の広闊な景色の中にふいと首を突き出した恰好だ。

高曇りの弱い陽射しが海面を撫でて色を深め、海の果ては宮古本島北端の低平な岬に区切られている。午前中男は、その視野の中にある狩俣部落かりまたで正月行事を見てきたのだった。

昨日は夕方まで狩俣部落での行事を取材した。ずっと小雨が降り続いて冷たく、取材の最中、男は寒気をおぼえ、咳をしはじめた。行事が終わった後、最高神女であるアブンマに、明日も来ますのでよろしくと挨拶をして帰ろうとしたら、アブンマの老婆は男の容態を親切に気遣ってくれ、風邪によく効くといって自家製の薬酒を与えてくれた。一時間に一本しかないバスを待ち、平良港近くの宿に帰った男はその夜熱を出した。朝起きると風邪は軽くなっていたが、寝過ぎしてしまっていた。あわててかけたが遅刻してしまった男を、アブンマの家では十数人の神女たちが行事の開始を遅らせて待っていてくれた。男は恐縮し、わびて、緊張しながらビデオやノートの記録にかかった。

その家の一番座で、正月らしく装った神女たちがはじめはおごそかに神歌を謡い、次いで立ち上がって腕を組み、列なして荒々しく畳を踏みつけ、まるく回りながらトウクルフン（所踏み）の神歌を謡った。それから次の歌、次の歌と謡い重ねていくことに神女たちの気持ちをはれやかに浮き立ってくるのがわかり、最後は輪が乱れて、五十を過ぎた神女たちが娘のようにはしゃぎ踊る中に男も引き入れられた。神女たちの驚くほど艶のある歌声と放埒な笑い声が男の耳に残り、そしてふと、ああ、狩俣では風が絶えていたな、と思い返した。北東から吹きつける風は、海べりの断層崖でさえぎられ、そのふもとの狩俣部落には朝の陽光がおだやかに溜まっていた。

防波堤のつけ根から白い砂浜が西に延びている。干潮時らしく、砂浜のさらに海側にサンゴ石灰岩の黒々とした岩床が浮き上がり、帯のように島を廻っているようだった。道はなくとも、その干瀬ヒシ伝いに、島の西側から北側へとまわりこめるかもしれない、そう考えて男は、防波堤の外側に廻らされたテトラポットから砂浜に跳び下り、歩きだした。

少し行った所で、浜に突き出た大岩を廻ると、思いがけない近さに人の姿があった。黒いズボンの裾をめくりあげた女が、身体を折り曲げて濡れた岩床の海藻を採っている。男は挨拶しながら近づき、ああ、アオサですね、こちらでは何といますかね、と話しかけた。身を起こした女は、少し間を置き、アオサ、とだけ答え、内側にたたんでいくようにか弱く笑った。手のザルにあざやかな黄緑色のアオサが半分ほど溜まり、しずくの筋が白く垂れている。そのアオサをどうしますか、やっぱり汁物に……べつに不審な者ではないということを表そうとする気持ちが男に動いて、やや饒舌になってなお問いかけると、その三十代なかばくらいの小柄な女は、低い声で、ええ、そう、採ったアオサはよく水洗いをしてね、これが大変、砂を落とすのが、それから日干しする、余った分は冷凍庫に入れておく、そうしておくとな年中食べられるから……。

女の調子が男の方を押ししてくるのでなく、声を出したそばからそれを自分の側に引きとっていくというふうなので、男の合づちも女に届く前に拡散してしまいうようで、女は薄い透明な膜に包まれているように男には感じられた。今度は女の方が、今の船で？とその薄い膜の内側でくぐもるように訊く。ええ。ここは初めて？いや、二回目。去年の、そう十一月

の終わりだったか、一度来たのです。まだ暑い頃でしたが……。昨日が、旧正月の元旦でしたね、こちらでは旧正月は祝わないですか？ええ、そうね。新正でするね、だいたいは……。島から出た人たちが新正に帰ってくるから。でもオバアたちの神ごとは、旧正でもやるみたいですけど……。これから、どこへ？男はやわらかくふるまおうと努めるのだが、男を上目づかいに見る女の窮屈そうな感じはほどけてこない。ええ、前に来たとき、部落の中は歩かせてもらったので、今日は島のまわりをまわってみようと思つて……。歩いてまわれるかな？さあ、どうかね……。行ける所まで行つてみますよ。どうも、おじゃまして……。

白浜はしばらく行くと途切れ、濡れて黒光りする岩床の上を、水たまりを避けながら渡つていく。無数に突起のある荒い肌理の岩床には、ところどころ水気をたっぷりと含んだアサがこびりついている。進むにつれ前を、全身目のようになった岩かげのカニや水たまりの小魚がいつせいに神経質に逃げ走る。片側は波に浸食されてそそり立つ荒々しい岩壁で、その頂きには常緑の草木が密生し、上を風がもつれあうように渡っている。薄陽が照っているが風の強い日だ。島を遠巻きに巻く環礁でうごうと潮が鳴っている。

男は、さっきの女が、前に来たときに部落の中で出会つた、あの宙を舞うような女でなかつたので、ややほつとしていた。しかしその思いはゴム仕掛けにかかつたようにすぐに反対側に揺れて、以前よりも強くあの女との再会を願っている自分に気づいた。いや、こんな日なら、どこかの干瀬ヒシであの女もアサを採っているのではないだろうか、あの女は陽の光と風によく似合うのだから、などと夢想していると、前方にまた、ズボンの裾をめくりあげて海藻を採っている女がいた。近づくと、あの女ではない。しかし顔を見合わせると、前に男が来たとき話をした島の神女のうちの一人とわかり、女の方も、ああ、前に、と男を思いだしたようで、身を起こして表情をやわらげた。前は男が食べ物を求めて駆けこんだ商店で偶然出会い、座敷で店の老婆も加わつて一時間ばかりも談笑したのだった。

そのときは島の暮しがおもな話題になつて、男が自分も島、四国の端の離れ小島の生まれだというと、それからは井戸の水汲みや電気や交通の不便、薪拾いや食べ物や信仰のことなど今昔の島の暮しぶりを、老婆が出してくれたナマコの煮物などつつきながら、二つの島を比べるように三人で喋りあつたのだつた。そして五十くらいその神女が、どこも、島は同じだねえ、と溜息をつくようにいつて笑つた。同じですねえ、ほんとに、と男も返した。同じだねえと幾度も神女が気持ちよこめて繰り返す口つきに、男はなぜか慰められるような気がしたものだ。常はすっかり忘れていた故郷の、ここよりは北の厳しさをもつ小島を、そのときはなつかしくさえ思い返したのだった。

前からの続きのように、男は女とアサの話をする。アサ採りは、まあ女の楽しみね、気分がいいから、腰が疲れるけど、と女は笑う。正月のことを訊く。そうね、正月はもう新でするようになったね、こちらでも。ええ、そう、昨日は元旦だから部落の行事が少しあつただけど……。女の口つきはゆつたりとして、やわらかく包みこんでくるような感じがある。それは、絶えず島の神を拝む生活の中で得た感情のレベルなのか。それにしても神女がこうしてのんびりとアサ採りをしているくらいだから、今日は神ごとはなかつたのか、狩俣と

はちがつて……。

あんたはこれからどこへ？ええ、前は部落の中を歩かせてもらいましたから、今日は島のまわりをまわってみようと……。行けますかね？女は頷いて、そうね、行けるさ。でも岩を登ったり、水に入ったりしないと行けない所がある。島の人はね、そうするさ。そうして島を一周することもあるさ。小さな島だから……。今は干潮？これから満ちてくるのかな。女は目を細めてゆっくり水際の方を見やり、そうね、もう満ちはじめているね。女に、風葬址を探しに海岸を廻ってみるのだ、と男はどうとういいだせない。この大神島の人に、まして神女に、神ごとや葬りのことを訊ねるのは遠い昔からの禁忌だと知っている。行ける所まで行ってみます……。そうね、潮が干いているうちに、行ってきなさい、気をつけて……。

男はまた干瀬の上を歩きだした。背後に視線を感じて一度振り返ったが、神女はなにげなくまた磯の上に腰を折っていた。しかし百メートルも行くと、露出した岩床の幅は急に狭まり、ついに岩壁にさえぎられた。その先へは足を濡らさなければ進めない。男は少しの間、機嫌をうかがうように空と海を眺めていたが、やがてズボンの裾を膝上までめくりあげ、運動靴のまま海水に踏みこんだ。またもゼロメートル散歩か、と思う。対岸の狩俣でも石垣島の川平かひらでも、男はそうして海拔ゼロメートルのなぎさを足を濡らして廻った。

狩俣では、部落の始祖伝説にある、天降りをした母なる太陽神ンマテイダが流浪の果てに探し求めたイソガーという海岸べりの自然井戸へ、そうして海に入らなければたどりつかなかった。十日ばかりも滞在した川平では、取材の合い間に、浜から浜へ、そうして波打際をたどるのが習慣のようになり、あるときは三、四時間もかけてほとんど半島を一周した。無人の浜には、流木や貝殻や木の実や漁具や発泡スチロールや外国製の容器などが流れ寄り、海亀や魚の死骸にたくさんのヤドカリがたかっていた。

浜を歩きながら男は、少年の頃の自分の小島での浜歩きを思いだして充実した。少年は仲間と磯伝いに歩き、ふだんは行かない浜に入って魚を釣ったり泳いだり、石を投げたりした。無人の浜は陰気で、何か正体なきもののかすかな声やうごめきを感じて昂ぶることもあった。「浜にはいろいろなものがおる。気をつけよ」と、あれは、島の大人たちに知恵をつけられていたせいだろうか。浜に打ち上がっているものを見るのも拾うのもわくわくした。浜に寄りつくものには目に見えるものと見えないものがあつた。潮と風が、かなたの陸地からも海底からも、いろいろなものを寄せてきていた。ああそういえば、故郷の島の浜でも、たいてい風と波がもつれあつて遊んでいたな、と男は昔を思い浮かべたものだ。

南島に来てからの何度かの経験で、環礁の内側のサンゴ石灰岩のなぎさは歩いて廻れることを男は知った。だからここでもたいてい大丈夫だろうと、男はやや冷たい水をかきわけ、どンドン進んだ。大神島の風葬址は北西部の海岸にある、と何かの記事で読んだことがある。男の頭の中には、海岸に洞穴がいくつか口を開け、その中に古い人骨がごろごろしているだろうという想像がほとんど固着していた。以前に見た二、三の風葬墓がそうだったからだ。今その場所に近づいているはずだ。だが、それにしてはさっきの神女が気軽に、行けるさ、行ってきなさいと、とがめる気配もなかったのが不思議ではある。

洞穴は見あたらなかったが、岩がかぶさって横穴のようになっていた所はあちこちにあり、男は見つけるたびに這いのぼって中を覗いてみるが徒労だった。小石で塞がれた小さな岩穴を見つけてはっとするが、それは波や風の気まぐれにすぎなかったろう。ごく狭い石浜を渡って岩のせりだしたその端まで行くと、もうその岩床は深みへと落ちこんでいた。男は少し引き返し、棘のような突起のある荒々しい岩肌をよじ登り、越えてようやく次のまた小さな石浜に出た。見るとそのあたりを起点に、大岩が点々と沖の方へ列なっている。ジャンパーのポケットから磁石をとりだしてみると、もう島の北西まで来ていると知れた。

その奇岩の群れは、数十メートルの間隔で定規を当てたようにほぼ一直線上に並び、さらに沖を意欲している。どの岩も下部が抉れて一本足のようになり、その上に魁偉な相貌をいただいている。それは、狩俣の方から、風景の中に目立って眺められた岩の柱列だ。狩俣の遠見台付近からは、東方海上に小ぶりの三角形をかたどる大神島の、その柱列は島の底辺を倍にも広げ、しかもある目に見えぬもの、意志を狩俣の方へ奇しく示現しているように男には眺められたのだった。狩俣に住まう神は子の神、大神に住まう神はその親の神、と土地の人々はいふのだ。

今、岩の柱列は風を切り裂き、あたりには海鳥も見えない。柱列のずっと先には波が烈しくくだけ、環礁は島を遠巻きにして荒涼としている。

男はまた深みに突きあたり、そこはかたわらの岩も鼠返しのように抉れて登っていけそうもなかった。しかたなく肩掛けバッグを肩の上にかつき、ざっと海に入りこむ。突き出た岩のすぐわきを廻っても、腰まで水に浸かった。その岩をまわりきった所は、思いのほか広大な板干瀬イタビシの上で、潮を含んだ風が唸りながらまともに吹きつけてくる。環礁に打ちあがる波の音が、自在に集散しながら耳孔を脅かす。ここでは音は風であり、風は音であった。

崖の側に寄りそって歩き、また岩の裂け目を見つけては這いのぼってみるが、やはり人骨などは見つからない。男のなかに、だいいちこんな近寄りがない場所を島びとがわざわざ墓所に扱ぶものかという疑いがようやく萌してくる。では、もっと上の方か、と仰ぐと、テラス状になった丘の上に荒々しい断層崖がさらに屹立している。あの断層崖の上か、下か、ともかくあのあたりかもしれない、と眺めるが、しかし岩と密生する草木にさえぎられて到底そこまではたどりつけそうもない。泡を含んだ波が板干瀬の上をさあさあと流れ、男の足もとを浚いにくる。潮は満ちてくる勢いだ。いつの間にか陽もかげっている。だが男は、軽くめまいの起こるような疲労を意識しながらも、いくつかの迷路をやっと潜りぬけてきた者のように、後戻りする意欲をまるで喪っている。

港から登るかなり急な坂道の両側に、学校や離島センターなどが位置して、間に赤土のパイアの畑が段をなしている。道がわずかに折れ曲がってひとかたまりの集落の中へ入りこんだと思えばほどなく、船上からも高みに目だっていた給水塔のもとに到り着き、振り返ると一目で戸数がたちまち数えとれるほどの小さな部落のたたずまいなのだった。十一月も末だというのに午後は焼けつくような陽射しで、一気に登って汗を噴きだした男は、さつ

きから感じている空腹よりも陽射しを避けられる場所を欲して食堂などを探してみようとするのだが、暑熱に耐えてまどろんでいるような家々のあたりにも人の気配は乏しい。

しかたなく引き返しかけたとき、道の角に突然女が一人姿を現し、大股に男のいる方へ登ってくる。これ幸いと男は、近寄ってきた女にどこか食堂はないかと訊ねてみたが、女は驚いたふうに立ちどまり、深い目つきで男の顔を眺めるばかりだ。腹が減っていて。何か食べ物を買っている店はありませんか、と男は言葉を継ぎたした。すると女は唐突に男の腕をとり、どこかへ導こうとする。女の動作がすばやいで男は従うよりなく、ただ女が長い洗い髪で、白い筒のような着物に素足なのを珍しいと気づきはした。

連れていかれたのは人家の間の、石積みで囲い上部に手押しポンプの取り付けてある井戸のそばで、女が身体を曲げてポンプを押すとブリキ製の筒口から白濁した水が勢いよくあふれ、下に受けるバケツをたちまち満たした。この水を飲めというのかと男がいぶかっている、もう男の存在など忘れたかのように、女はバケツの把っ手をつかんでさつさと上の方の畑まで運び、水を撒き散らした。なおはかりかね、たゆたっているところへ、そばの家屋から白髪の老婆が現れ、女に二言、三言島の言葉で鋭く声をかけると、女はバケツを井戸端に転がしておいて、真剣な表情でもと来た道を駆け降りていった。その姿が、洗い髪が靡き、白い筒のような着衣が羽のように広がって宙を舞うようだった。

それから男は、その老婆に教えられて、部落に一軒だけあるという小さな商店を訪ねた。食べ物を探めると、店の老婆は幸い座敷に上がれと勧めてくれ、先客の一人いる座敷に男は詫びをいいながら上がりこんだ。

クツキーと魚の罐詰という妙な昼食をとり、そのあとに出された茶を飲みながら、男は女たちとぼつぼつと雑談をかわした。男が、自分も四国の小さな島の出だと告げてからは、話はおもに大神島と男の故郷の島の比較のようなことになった。男が子供のころの記憶をしゃべると、どこも、島は同じだねえ、と先客の女がしみじみといい、店の老婆が合づちを打った。そのうち話の中で、その二人の女とも島の祭事をつかさどる神女であることがわかり、男は僥倖を喜びながら、島の神女の、島にとどまり潔斎して神に仕える厳しい暮しぶりの一端を談笑のうちに聴きとることができたのだった。

店といってもごくふつうの民家の、二番座が店にしつらえられていて、壁際の棚やガラスケースに所狭しと商品が並べられている。米や卵もあったが、缶詰やインスタント食品の類が多かった。中央の高い位置に仏壇がある。隔ての襖が半開きになっている一番座の方からは、テレビの音に混じって時々老爺の咳きか聞こえてくる。

庭先の畑にまだ丈低いパイヤが植わり、それでも葉の下に重たげに緑の果実をたくわえている。昔は、水汲みが大変だったさあ、と勝気そうな店の老婆がいった。夜中に水汲みに井戸^カに出かけていったさあ、それでも先に来ている人がいて、順番待って、水が湧くの待って、坂を運んで……昔の女は、それは苦労だったさあ、と話しているところへ、庭先にさつきの若い女が突然また現れた。現れるやいなや、女は老婆に島の言葉で何か早口にまくしたて、硬貨を一枚、ゴザの上へぽんと放り投げた。老婆は強い調子で二言、三言受け答え、

男を気にするように苦笑いを浮かべながら硬貨を拾い、奥へ入った。

女が戸口の敷居の上に足を投げ出して坐ったので、顔の位置が戸口のわきにいる男と不自然なほど近かった。部屋の中ごろまでとろとろと這い寄ってくる陽射しを、男は窮屈に身体を寄せて避けているのだが、女は半身を光にさらして、何か昂然とした感じで仰向いている。あらためて見ると、女の顔は陽によく灼けているが非常に整っていた。眉が濃く、まなざしが深い。南島の女にしては長身で身体つきも均整がとれてなまめかしく、そして身のまわりに張りつめたような感じを漂わせている。若々しいのだが、見方によっては三十とも四十とも見え、年齢の見当がまるでつかない。男の目を気にしたか、女は投げ出していた両脚を立て、それを少女のように両手でかかえてうつ向いた。前になだれてきた豊かな髪を口の端に含んだ。その一々の所作に、何か明瞭な意志が針先のように尖っている。二度まで強い陽射しの中へ突然現れ、不思議な存在感を漂わすこの女は、この島の土と水と光の妖しい造型でもあるのかと男には疑われた。

奥から老婆が戻ってくると、女はひらりと地面に下り立ち、そして無言のまま品物と釣銭を受け取ると強い歩を踏んで帰っていった。その足がやはり素足だった。後で男は、その素足の記憶から、その女の性と精神のかたちを思わせられた。あときは店を出たあと、男は島の西の拝所にまわって小屋の前に並べ置かれた陰陽二つの石を見出したのだったが、そうした島びとの信仰のただ中から、あの女がこの世に現れ出てきたように思われてしかなかった。

板干瀬の上を歩く男は、もう風葬址の発見をあきらめていた。すでに時計回りに島の北端を廻り、東の方へと下りていつている。地図で見ると菱形に近い大神島の、北東側の海岸は長々と続く崖で、その実際の海岸線は割れ落ちた巨岩が寄るべないほど鋭角に重畳している。暗鬱に変わった空の下、荒くれた岩と干瀬と海の呼吸のほかは何もないその風景は、男の中にあの石垣島北西部の磯を歩いたときのようなしなやかな充溢を漲らせてはくれなかった。無人の磯に佇んでいることでは同じだったが、この島の北側の磯は、むしろ死後の世界、そう、風に紛れながら冷たく凍えきった憂愁ばかりがそこそこに漂っているような感じで、見る者の感情の泡立ちは無化され、皮膚はしだいに色を失っていくようだった。神女はああ言ったが、ほんとうは島びとの誰もここには来ないのかもしれない、来てはいけなかったのかもわからない。

浜には陽の浜と陰の浜があると、南島の島のいくつかを廻り歩いて、男は漠然と思っていた。一つの小島にも、夏には海水浴でにぎわうような明るい浜と、一年中誰にも見捨てられているような陰気な浜とがある。陰気な浜は、探してみるとときまつて近くの草かげや畑のそばに、南島らしい亀甲型や破風型の墓室が陰鬱に立ち並んでいる。土地の人に問うと、あそここの浜は死霊たちが話をしている所だから近づくかぬほうがよいと教えてくれたりする。

この浜、浜というより磯も、墓こそ見えないがたしかに陰の方にちがいない。死人の骸は北西部の崖の高みに打ち棄てられ、死霊はここらの磯に寄り集うのだ、と今教えられてもた

いして驚かないだろうと男は思う。この島の南側は神の領する聖地、対して北側は他界、そして人の世はその中間に位置しているというわけか。だが神の国と他界との境界はあいまいで、それどころか二つの間には太い回路が通じていて、祭ともなると死霊は祖霊となって島の南方のある岩場に降臨してくるといふのだ。そして、その祖霊を迎える祭の場で、神女たちが行うという秘儀……裸になって交媾の所作をするのだという伝聞説を何かで読みましたけれども……。よし死↓祖霊↓性・生↓死という循環する観念があるとして、だが輪のように廻るその観念の底には、この磯の景色のように冷えきった憂愁、または虚無が深々と流れているのではあるまいか。南島のあでやかな自然の裏側には荒涼たる死の風景があつて、それを意識の底に沈めながら長い時代を暮してきたからこそ島の人々はおだやかで受容的な表情をしているのではないか。ここでは、死は生を凌いでいるのではあるまいか。生は、たとえば暗闇の中にともる細い火のように、圧倒的な死の闇にとり巻かれ侵されながら、いくらかの明るみとしてのみあるのではないか。風は吹き荒れ、めくれかえり、もつれあう。きしみあい、死に、蘇る。すすり泣き、歌っている。

東の御嶽^{ウタタキ}の方へ行ってみよう、と男はふと思いついた。死から光明への回路を、それがあるとしての話だが、たどれるものならたどってみたい。それからしばらくなお岩床を歩いても登り口は容易に見出せなかったが、もう島の北東部を過ぎたかと思われたころ、やや広い石浜の奥に、上から滝のようにほとんどのれ落ちてきている小道を発見した。道は左右から薙ぎ倒されたススキの茎や葉で蔽われ、まだ草汁がにおって、刈られてからほどないと察せられる。雑木や雑草の間を強引に拓いて、急な登り坂が続いたあとは曲折する道で、男はそばの木々につかまり、息を切らしながら登った。そのうちに、それまで男の全身をなめしていた地鳴りのような潮騒は急に足もとから退いていき、荒んでいた風もゆるゆると虚空で旋回するばかりになった。

常緑の木々に埋もれて、方角をたしかめられないままに、より高みへと身を持ち運んでいく。すると道は途中から切ってまた接いだように、使い古された赤土の道にかわり、左右に畑地が展げはじめた。昔話の主人公のように、^{モノ}霊たちの棲む荒々しい他界からあつけなくこの世へと投げ戻されたようで、一瞬男はうつろな思いに落ち、しかしその端から安堵がめくれあがってくる。他界から戻ってきたといえれば大仰に過ぎ、しかしもう木の間隠れに部落の高みの給水塔を視野にとらえると、その下方に広がっているはずの屋根の下のなりわいに思い及ぶほど、人のおいをすばやく嗅ぎつけようとしている。

やがて赤土のパイヤの畑に突きあたり、前にここには来たことがあるなど目の記憶をたどりつつ行くと、行き過ぎて部落の端の家の庭先がもうちらちらとし、ちやうど船で乗り合わせた選挙運動の人たちが玄関口に集まっている。よそ者が一人島の奥をうるついている不都合を思い、あわてて引き返して、周囲の畑にも折よく人気のない、東の御嶽へと通ずる小道をまもなく探りあて、しばらく進むと呼び起こした記憶のままにその入口が口を開けている。その前に佇んで、ただ以前、この入口で同じように佇んだ折には、密生する常緑の木々が丸いトンネルをくつきりとかたどり、その葉の蓋いは明るい陽光を照り返して仏

像の光背のようにまばゆく輝き、小暗い空洞をより神聖な奥深いものに見せていたのだ。たとえ思い返す。その光の中の青葉の洞穴こそは、疑いもなく侵しがたいこの島で最高の聖空間であり、いやこの島のみならず南島の、いや人知れないまでもこの国の最も聖なる場所の一つだ、今そこに立ち会っている、というふうに思いが肥えふとっていくとたわいもなく圧倒されて、そのときはカメラを何度か向けるのがやつこのことだった。

今その闇は、曇天の下で輝かしいまといを失い、生物の腹腔のように息づかいをくり返しながらまどろんでいるようだ。やや右に折れ曲がっているような闇の穴がどれくらいか奥行きをもっているかは知れない。その奥にどのような莊嚴がほどこされているのかもまるで知れない。ただ見つめていると、その左右から盛り上がった緑の葉にかたどられる聖空間は、それ自身が胎内の造型かとも見え、その奥で行われる秘儀の姿をわずかにかいま見たような気に男はなる。この小暗い禁忌の杜の胎内で、生まれるもの、生まれ変わってくるものがあるのだろう。その秘蹟のとき、白い神衣裳をまとった神女たちは祈り、祝福し、謡い踊るのにちがいない。そして生まれてくるもの、死の世界から旋回してきたものは、きつと豊かな肉と力に満ち、光明の性質を帯びているだろう。

さつき北の海岸で見た荒涼と、今目の前の生の印象とが男の中で入り混じり、持ちあつかいかねて男自身が遠くはじきとばされそうになる。ほの暗い緑の空洞はどうかすると男を誘いこむようだが、落葉のまばらに敷いているその道は歩くことも進むこともできない。

あの女に再会したのは、東の御嶽から部落の方へ入る道の途中を、少し南側に下った所の東の井戸へ男がまわって見たときだった。雑草の疎らに生えそぼっている畑の一隅に、洗い場をセメントで丸く固めた東の井戸で、女はまた水を汲んでいた。前に見たままの洗い髪に白い筒のような着物なので、男にはすぐその女だとわかった。

女は囲いの縁に片足を掛け、井戸の真上に覆いかぶさり長身を傾けて釣瓶の綱を手繰っている。黒々とした豊かな髪が前にしなだれて顔を覆い、両腿が剥きだしになっているので、全体にその姿は尋常を超えていた。

女は男に気づいて一瞥したが、何も見なかったように視線を戻した。深い目の、真剣な表情だった。水の漲った釣瓶を手にすると、それを提げながら十歩ばかり畑の奥の方へ歩いて、数本立ち並ぶバナナの木の間を根もとあたりへぶちまけた。すぐとって返して、釣瓶を井戸に投げこみ、片足を掛けて井戸の上に覆いかぶさる。また水を汲み上げ、畑の奥に撒き散らしている。バナナの木に水をやっていようだが、しかしそのふるまいはどこか調和を欠き、それでそれが意味ある作業なのかそうではないのか、男には測りかねた。聖なる井戸の水を汲み、土に撒き散らすことが女に任されているのか、それともまったく無意味な作業を狂気に導かれるまま勝手にやっているだけなのか。だがいちずに繰り返されるその所作は、どこか神祭りの儀礼に似通っているようだった。胸や腿に余った肉がいたいたしいほど、女は宿命的な祈りにとらわれているようにも見える。白っぽい着衣の水が濡らし、素足も濡れて汚れている。肉が光っている。

部落の方から子を横抱きにした中年女が小走りにやって来て、甲高い声で女を呼んだ。女は鋭く振り向き、一瞬動きを止めたが、提げていた空の釣瓶を乱暴に投げ捨てるとさつと身を翻した。男のそばを髪がふれるほど近く過ぎ、そして大股に部落の方へ戻っていった。やはり宙を舞うようだな、と男は後ろから呆けたように見送った。

女が消えた後、濁った空から激しい雨が落ちてきた。たちまち井戸も畑も濡れそぼった。部落が白くかすみ、海の姿も見えなくなった。